

インターアクトクラブバッジ授与式



北海高校インターアクト部 澤田志奈さん挨拶

本日は、私たちにインターアクターとしてのバッジの授与をありがとうございました。

私たちは、ロータリークラブの皆様のご支援のもと、これまで様々な活動に参加させていただきました。6月のインターアクト年次大会は、防災がテーマの大会で、災害が起きたときの対処法や、周りの人々たちとの助け合いと共存の大切さについて学ぶことができました。8月の台湾研修では、言葉が通じない中で、どのようなコミュニケーションをとるかを考えたり、台湾の方々と交流をすることができました。



米山梅吉論「梅吉くんの夢」 梅澤英行会長

梅吉くんは明治元年2月に、東京の新橋と虎ノ門の間あたりにあった奈良、高取藩の中屋敷で男3人兄弟の3男として生まれました。お父様は和田竹造といい江戸詰めの上級武士、またお母さまは名前を「うた」さん、と言い静岡の三島にある三島大社で代々神官を務める日比谷家の日比谷右京の娘さんでした。教養に恵まれた環境で生まれた梅吉くんでしたが、思わぬことが起きます。梅吉くんが5歳の時にお父様が43歳で亡くなってしまったのです。そのお父様が亡くなったことで、結果的にお母さまの実家の三島に移り住むことになりました。

三島に移り住んだ梅吉くんは7歳で「映雪舎」という小学校に入学します。梅吉くんが「映雪舎」に入学した理由は梅吉くんの長兄で12歳年上の和田栄次郎が、この助教をしていたとい

う縁でした。梅吉くんはここで漢籍を読み解く(中国の歴史書を読み、その思想を勉強する)、そして漢詩の作り方などを勉強していました。梅吉くんは、ここで抜群の成績で、周囲から神童と言われるようになったとあります。そうして暮らしていた11歳の時に、梅吉くんにとって大きな出来事が2つありました。

一つはアメリカで2期8年間大統領を務めたユリシーズグラントが任期を終えた後に2年をかけて世界中を訪ねる旅をして、最後に日本を訪ね三島に来ることになったことでした。元大

■本日のロータリーソング

我らの生業

2025-2026年度

国際ロータリー会長のメッセージ

国際ロータリー会長:フランチェスコアレツツォ

よいことの
ために
手を取りあおう



米山梅吉くん15歳



統領の訪問という事で三島は大騒ぎだったようですが、当日あらかじめ小学生の中から選ばれていた梅吉くんは、用意されていた宿舎の近くまで行くことが出来、長身でがっしりした体格のグラント元大統領を見ることが出来ました。そして彼が被っていた黒くて長いシルクハットのことが後々まで強く印象に残ったと回想しています。これが、梅吉くんが初めて触れたアメリカでした。

もう一つは長泉上土狩(かみとがり)の米山家から梅吉くんを是非養子として迎えたいという話があったことです。勉強も優秀でイケメンで聡明な噂の梅吉くんに白羽の矢が立ったという事です。13代目の当主米山藤三郎には梅吉くんより7歳下に一人娘の春子さん(後の梅吉の奥様)がいるだけで男子の嫡子はいませんでした。この申し出について当人の梅吉くんはもちろん判断できませんので、お母さまと長男の栄次郎さんが決めたと思います。迷ったと思いますが、梅吉くんの将来の事を考え受け入れることにしました。

明治14年、「映雪舎」を卒業した梅吉くんは、私学の沼津中学校に入学しました。ここの前身は沼津兵学校で、西洋の文化や学問、英語などに力を入れた当時の日本の最高水準の教育機関でした。梅吉くんは三島の家から8キロ離れた学校まで、毎日3時間かけて通いました。さぞ大変だっただろうと思うのですが、通学の道からは富士山がとてもよく見え苦痛ではなかったと後述しています。

沼津中学の生徒たちは英語で書かれた洋書を読み、欧米から入ってきた自由な思想や民権論などに影響を受けました。このころの日本はまだ憲法も議会もなく、多くの論客が持論を展開していた時代であり特に自由民権運動が盛んでした。「自由」とは人

は幸福を求める権利を誰からも奪われない事であり「民権」とは国民が政治に参加する権利のことで国民にも関心のある話であったために、沼津にも多くの弁士が来て演説を行っていました。梅吉くんはこういった環境の中で勉学に励みながら、学校を抜け出し演説や裁判などをよく聞きに出かけたと言います。それほど新しいこと、知らない事への吸収欲が強かったということだと思います。また自分で自分の考えを書いて残したり、学校で友人に発表したりと、新しいものを積極的に吸収する一方で、自分の主張をはっきりと述べるような少年に成長していきました。

そういった過程で梅吉くんには「自分はそのままこの地で地主となって一生を終えるので良いのだろうか?」という疑問と「もっと新しい知らないことを勉強したい」、「もっと英語が話せるようになり知らない外国のことも行って経験してみたい」という思いが日々募ってきました。しかしそのことのハードルは高かった。自分を養子として迎え入れてくれ、何一つ不自由なく暮らしていけている現状を考えるに、とても養父に向かって「東京に出て勉強したい」とは言い出せない、そのことは梅吉くんも良く知っていたと思います。どうでしょう、100人いても99人は諦めると思います。しかし諦めなかった一人が梅吉くんでした。

こともあろうか梅吉くんは養父に一言も相談もせず、15歳の12月に黙って家を出てしまったのです。養父に相談しなかったのは、相談しても断られる、そうなるで一層困ってしまうと思ったからのようです。梅吉くんは3日かけて歩いて箱根の山を下り、さらに横浜から東京まで歩いていったようです。東京に着いた最初こそ訪ねていく先を決めていたようですがその後はすべて白紙だったのです。その後いろいろなことがありましたが、多くの人との出会いや協力を得、大きな志を持ち自分の夢に向かってひたすら歩き続けた梅吉くんでした。そしてついに21歳の時に念願のアメリカ行きを果たすことになったのです。

引用ならびに参考文献

- 1) 柴崎(石川)由紀『米山梅吉ものがたり』
初出『銀の鈴社』2019年7月1日
- 2) 三戸岡道夫『米山梅吉の一生』
初出『栄光出版社』2009年4月1日